

# 友だち関係の発達

———幼児の成長を追って———



西 島 淑 子

現在のすがた——友だちからポツンとはなれて

さびしそうな——

正子は、三十六年十二月二十二日生まれ、あと一週間足らずで、満七歳になるうとしています。生まれてからのことを考えなおしていると、長いような、短いような、時間を超越したふしぎな感じになります。

いま「問題といえど問題になることですが」と小学校の先生にいわれることは、自分からうまく中に入っていく、友だちといっしょに遊べないことだそうです。「遠足の時に特に感じられたのですが、みんな思い思いの仲間と輪になって、楽しそうにおべんとうをひろげている時、正子ちゃんは、一人ポツンとはなれてさびしそうでした」

小さい時からとても社交的で、人と親しみやすく、なんでも思ったことが、臆せずしゃべれるところが、正子の長所だと思ひ、友だち関係も人なみには、とばかり考えていただけに、少しショックでした。しかし、今、ここで十分考えなおさねばいけないのです。試みに「友だち」を中心にした正子の言動の記録を幼児期にさかのぼってみたら、なにか得られるかもしれないと、少し整理してみました。

友だちへの関心のはじまり

。一歳九ヶ月（38・10・15）お友だちのお兄ちゃんが見えた時、

「こんにちは、あつたは(明日は)、きょうはおてんき、ぼくは(正子のお友だちのこと) おうち? チンチン?(いつも自転車にのせてつれてくる)」

・一歳十一ヶ月(38・12・12)

「たーちゃん(男の子)とこ遊びにいいかなー、たーちゃんとこ遊びにいいかなー」と一人ごとで何度もいうが遊びには出かけなかった。

・二歳二ヶ月(39・2・25) ママと電話ごっこで、

「明日はなにして遊ぶの?」

「おねえちゃんと遊ぶの」

「おねえちゃんってどこのおねえちゃん?」

「おとなりのおねえちゃんだよ」

「ママもつれてって」

「いやだよーひとりで行くの。チンチン(三輪車)で行くのよ」

・二歳三ヶ月(39・4・6)

「あつ、ちようちよ いっちゃった。おーい、ちようちよ これあげるよー。まあちゃんむいてあげるから(ガムの紙) ちようちよ おいでよー。いっちゃったよ。どこへいくのママ、ちようちよは。

あ、ちようちよ、ここにいた。ほーらあげるから、あつ、いっばいちようちよ わあーい、おいでーあげるから。いっちゃった。まあちゃんのおうちの方へいっちゃったよ。もこーでかかってきたガムあげるよー。いっちゃったねママ、ちようちよガムたべないの? ちようちよはなにたべるの? ガムたべないのかなー」

・二歳五ヶ月(39・5・29) 朝ねどこでだいていた人形にいつものように語りかけていたが、「このあかちゃんは、お口きけないの、なんにもいえないの」と、はじめて返事をしないことに不満と疑問をもつ。人形をしばらくみつめていたが、自分の耳に、人形のほほをくっつけて、「あつわかった。きこえるよ、え? はいはい、うん、わかった」とまたはなしはじめる。

・二歳五ヶ月(39・6・4) 来客で幼児が大勢。いっしょによく遊ぶ。その中の一人、足の不自由な子に特に気をつけて、手をひいたり、水をくんであげたりして遊ぶ。とてもはりきって遊ぶ。

・二歳六ヶ月(39・6・25) やきもちをやくようになり、友だちにおもちゃも、なかなかかしてやれなくなる。

・二歳六ヶ月(39・6・26)

「ことりことり、ほらことり、まあちゃんの方へおいで。ことり、なんでこないのかなー。こっちへおいで、ことり。お手々こうやってえさをやるの、こっちへおいで。ことり、ことり」

・二歳六ヶ月(39・7・11) 一人で受話器をとって、「もしもし、かつらちゃん(男の子)ですか」と友だちを呼ぶ。ダイヤルをまわしてやる間も受話器をはなさず。「もしもし、かつらちゃんいますか。遊びに来なよ、ね、おいでよ」

電話をかけおわるとすぐ、「まだこないのかなー。いつくんの、かつらちゃんこないかなー」

遊びにきたら大喜び、とてもよく遊ぶ。男の子の荒い言葉使いや、することをみんなまねる。しまいには、すべり台からいっし

よにとびおりて鉢あわせ。かえり際、痛くてべそをかく。

。二歳六ヶ月(39・7・14)

「かつらちゃんこないのかなー。ママ、まあちゃん友だちがいなくてつまらないね」

まわりの家が少しはなれているうえ、同じ年の子が少なく、自分からはなかなか外に出て遊んでこない。なかよしのお友だちは、みんな遠いところの子ども。おつかいについて行って、店の前などで、子どもにあうと必ず大ききわぎ。「遊ぼうよ」とよびかけたり、くっついていたりする。「あの子と遊びたいなー」

。二歳七ヶ月(39・7・29)

「おーい、せみー、まあちゃんとかないからおいでよ」

。二歳八ヶ月(39・8・21) 近所の子どもたちが遊んでいるところにいれてもらって、おにごっこをするが、まだルールをよくのみこめない。でもいっしょうけんめいかけまわる。

一人ごとをよくいう。バイちゃん、モウちゃん、エルちゃんの三人がいつも出て来る。

。二歳八ヶ月(39・9・12) 大きな子が二人ぶらんこにのっている。正子もいっしょにのせてもらおうとかけていった。大きな子たちは、チビが一人かけてくるのを見て遠慮したのか、急にぶらんこをおりてどいてしまった。正子は急に悲しそうにべそをかいで立止ってしまう。「自分で」とか「まんまでいいよ(そのままでもいいよ、あとは自分でするからということ)」とかをよく使う。

「お友だち」ということもよく使う。

。二歳八ヶ月(39・9) 正子の生活で、本のしめるところが大きくなってきた。以前は、一冊の本を読んでもらうと満足したり、また次の本を読んで持ってきたりしたが、近ごろは同じ本を何べんでも読ませ、じっときいている。また本の内容とさし絵のちがいをいなどいをいちいち指摘したり、おとなの話をきいていて、本で読んで知っていることと少しでも関連があるとするや、すぐそれを持ち出して話の仲間に入ってきたりする。だんだん、自分で勝手に声を出して読んだりするようにもなる。

### 弟の出生——対人関係の変化

。二歳十ヶ月(39・10・24) 弟誕生、急に自分のことを「おねえちゃん」というようになる。甘ったれになる。泣き虫になる。ババに急にくつくようになる。「おねえちゃん、赤ちゃんすきじやないのに、病院で、赤ちゃんくれたの?」

とてもよく物語を話す。初めからおわりまでどうにか話ができるようになる。赤ずきん、ガリバー、ジャックと豆の木など。

。二歳十一ヶ月(39・11・15) 急に絵をかきはじめる。人間の絵ばかりかく。

次から次と母親に注文を出し、母の手をかりようとする。なかなか外遊びをしなくなる。

「ね、はやくエイトマンが、アトムをつれて、まあちゃんにこないかなー」

弟におっぱいをやりはじめたりすると、それまで遊んでいたこ

とをやめて、まわりにくつついてきてはなれない。弟のベッドにとびこんだり、ミルクがのみたいとせがんだりする。友だちとも遊ぼうとしない。

・二歳十一ヶ月(39・12・11)よく遊んでいたキュービーをクレヨンでぬりつぶす。

・三歳〇ヶ月(39・12・23)急に男の子の言葉使いになり、自分のことを「ぼく」というようになる。

・三歳一ヶ月(40・1・18)はじめて一人(人形だいて)で、遠くの友だちのところまで遊びにいつてくる。

「チェッ」とか「さあねー」とか「まあまあ」とかいう言葉を使うようになる。「ぼく」というのが朝から晩まで自然に出るようになってしまう。

・三歳一ヶ月(40・2・1)寒いから家の中の遊びが多くなる。

よく忍者になって遊ぶ。もう一人の忍者がいるのだとよくいう。それに向って、とてもごきげんで話しかけている。「かけてこい」「よし」とかいつている。理由もなくよくめそめそしていたのがいつのまにか泣かなくなっている。

### 友だちができる

・三歳一ヶ月 街のお肉屋さんのよう子ちゃん(同じ年)とお友だちになる。よう子ちゃんは兄姉がいる。とても活発で、みんなでびよんぴょんと高い台がとびこえられるのに、正子にはできない。年上の子に手をつないでもらって、恐る恐る慎重にとぶ。家

にかえってから、「二回上手にとべたのよ」とパパに報告していた。夜ねる時「もうお友だちねたかなー」

・三歳一ヶ月「ここはぼくの室だから入らないでね」と戸をしめ切って、中で長いことなにかしていることが多くなった。

・三歳二ヶ月(40・2・20)

「あの小鳥さんはぼくのお友だち？ それともあの小鳥さんは小鳥さんのお友だちがあるの？」

・三歳二ヶ月(40・2・21)人形の髪の毛を切る。「だってぼくの人形だもん、男の子の人形デパートにうつっている？」

黒い皮バンドをしてピストルうちをして遊ぶ。

### 環境の激変——二つの世界ができる

・三歳三ヶ月(40・4・16)岡山に転勤、アパート住まいに変わる。広い家、おおぜいの家族のなかで生活していたのが、急に少なくなり、そのうえ、パパは出張がちなので、ママと弟と三人の時間が多くなる。

・三歳三ヶ月

ものめずらしく、夢中で遊んでいる時が多い。ドア一つむこうのおとなりと同じ年の女の子がいる。いつたりきたりしてよく遊ぶ。物のとりあいでもよくけんかをして泣く。

アパートの生活がまだのみ込めず、どこの家にも入りこんでいつて、はなしたりごちそうになつてきたりする。

外でごぎをしいておままごと遊びをよくする。同年齢の女の子

が数人いる。さんぽもよくする。しかしいままでの調子ではやっていけないということによく出つくわす。言葉もだいたいぶちがう。

日曜日には、外で大声でさわいだりしてはいけない。だれのうちでも勝手に入ってはいけない。人のもっていないようなおもちゃはあまり外にもち出したりできない。いろいろな規制がふえてくるのに、順応がむずかしい。

。三歳四ヶ月(40・4・25) 鏡にむかって話していることがある。三面鏡にうつっている自分にむかって、「おい、出てこいよ、そんなから出てこいよ。出てこないよ、ここにいたいのか、おまえもか、そうだ、おまえもか、おまえもかおい。それじゃ出てこなくてもいいよ。おい遊びにこいよな、出てこいよ」

。三歳四ヶ月(40・5・6) おとなりの子とお絵かきして遊ぶ。

「黒いのはおとうさん、緑色はおにいさん。青はおねえさん、黄は赤ちゃんとお友だち、赤はおかあさん」

。三歳四ヶ月(40・5・10) 窓から顔を出して大声で、前にいた所の家族の名やお友だちの名をよぶ。

「たーばーにいちやあん、こも子ちゃあん、きく坊ー、おじいやあん、おばあちゃあん、よしみちゃあん、よう子ちゃあん、かつらちゃあん、しょう子ちゃあん」

それからママのところにきて、「ママ、よう子ちゃん(前にいたところで仲よかった子) みたいな髪にしようだい」

。三歳四ヶ月(40・5・11) 「ママ、いつになったらかえるの? ママとババとまあちゃんはいつになったらかえるの、はたの

(前にいた所)にさー、だってまあちゃんは、はたののしょう子ちゃん心配で心配でたまらないんだもん」

。三歳四ヶ月(40・5・17) 正子がいなくなつて、みんなで見つける。全く知らない家に入りこんで遊んでいた。

。三歳四ヶ月(40・5・18) 「かつらちゃん(前にいた所のお友だち)が『まあちゃんは』っていつてるかなー」チューリップの花をみて、前の家に植えて来たチューリップを思いだす。

「チューリップ、ババとうえたね、もうはたのへかえりたくなっちゃつた。明日ははたのにかえつちゃおか。チューリップ、まあちゃんもみたいなー」

。三歳五ヶ月(40・5・24) また窓から大声で前にいた所の人たちの名をよびつづける。

。三歳五ヶ月(40・5・25) 「ママ、みて、ほら、大きくなったでしょ。ほらね、やすのり君にも、けいちゃんにも、しょう子ちゃんにも(岡山の新しい友だちの名前) どれぼうにもまけないぞー。しょう子ちゃんにどれぼうがきたら、こら、どれぼううけないぞー、つよいんだぞーってやつつけちゃお」

。三歳五ヶ月(40・5・28)

「お手手のゆびさん? なあに、あんよのゆびさん、遊ば、あつ、遊ば、うれしいな、お手手さんですよ、あんよのゆびさんですよ、さとみ君(弟)のあんよのゆびさんもおいでよー」

。三歳五ヶ月 おとなりの子となかよくとてもよく遊ぶ。

。三歳五ヶ月(40・6・12) ババと二人でお里がえりする。

。三歳五ヶ月(40・6・23)

「めみちゃんのとまりはけいちゃん、けいちゃんのとまりはめみちゃん、まあちゃんのとまりはしょう子ちゃん、しょう子ちゃんのとまりはまあちゃん」と「こんべいさんの赤ちゃんがかぜひいた」のかえ歌でなんどもおもしろそうにうたう。アパートで、ちよつとドアをあければおとなりで、そこになかよしのお友だちがいるうれしさを表わしているようで、ママまでいっしょに次々とお友だちの名前を出してうたった。

。三歳九ヶ月(40・9・24) 新しい公舎がたつてまた引越ししなければいけないという話をきいてきて、「こんどまた、転勤するの? お山のもこーに? こんどいくおうちはとまりがあるの? めみちゃんもいっしょにいくの?」

。三歳九ヶ月(40・10・16) 「昨日その階段の所でまあちゃんといっしょに昌子ちゃんが遊んでいたでしょ、お砂の所でおままごとしていたでしょ、その時たけちゃんがやって来たでしょ、その時たけちゃん昌子ちゃんのおままごの道具けとばしたでしょ。そんなことしたら、もう幼稚園にいけないよねー」

。三歳九ヶ月(40・10・18) 昌子ちゃんのお誕生日に絵をかいあげようと、はり切ったかいた。渡すうとすると昌子ちゃんは紙片一枚でおもしろくなかったのか、うけとらず戸を閉めてしまうので正子おこって泣く。キーキをおすそ分けしていただいたが、まだおこっていて、その後も、「まあちゃんがせつかくおめでとう」といいにいったのに昌子ちゃんは……。」と悲しそうに泣く。

く。

。三歳十ヶ月(40・10・26)

「はたの昌子ちゃんはなんていうの」

「須山昌子ちゃんですよ」

「岡山の昌子ちゃんはなんていうの」

「福留昌子ちゃんっていうのよ」

「お二階の昌子ちゃんは何昌子ちゃん?」

「松永昌子ちゃんよ」

「ふうんおもしろいね。須山昌子ちゃんに、福留昌子ちゃんに、松永昌子ちゃんでしょ。まあちゃんも福留昌子ちゃんをつけてね、まあちゃんにもつけて、だめ、ね」

#### 幼稚園をえらぶ

。三歳十ヶ月(40・11・10) そろそろ私立の幼稚園の受付が始まっている。来年になってからだが、入園を前にして、もう一度市内で引越しをすることになっている。今いるところとはほぼ同じ環境だが、市のはずれから反対側のはずれに移らねばならない。近所に幼稚園がないようすなので、気がかりになり見に出かけた。そこから、朝晩だけは三十分おきに通るバスで、なお郊外に十五分位行ったところに、市立の幼稚園があった。広々とした田んぼの中の小学校のとなりにあった。古びた園舎で、おこちそうな便所にはちよつとびっくりしたが、中年の園長さんと若い先生方が忙しそうにしておられ、遠くからでも通わせる自信があったらど

うぞと話して下さった。テレビのあるお部屋には、小さいながらもならんでいた。庭の遊具は数少なかった。風のひゅうひゅう吹く道端でながいこと時間を待ってバスでかえって来ながら、ここは、通えそうもないなと考えた。

。三歳十ヶ月(40・11・15)とにかく期日ギリギリで、パパの勤め先の近くにある私立の幼稚園に願書だけは出した。市の中心街にある。公舎の人たちはほとんど、三年保育でその私立の幼稚園に通わせている。朝はパパといっしょにバスにのって出かけ、帰りは、バスののりばまで園の先生がおくって下さるのだそうだ。

。三歳十一ヶ月(40・11・25)こんど移る所の近くに保育所ならあるときいて、またそれを見に出かけた。市立の保育所で一応の設備のととのった保育所が小学校のかけにあった。「いまは共稼ぎの人たちが多くので、なんらかの理由のない限り、おいれできるとは、保障できません」とのこと。それに、朝から夕方までの保育時間も少し困る。「あそこのお寺で保育園をしています」といわれて、こんどはそこまで足をのぼす。小さな日蓮宗のお寺の庭に鉄棒やおすべり台や砂場が見えた。ふるい本堂のよこに廊下がのびて、そこだけガラスばりの園舎があった。お寺の奥さんが主となり、お坊さんと二人でやっている保育所形式より幼稚園に近いような保育園。柔和だがどこか筋の感ぜられる奥さんと話をしていた、ここに決めようと思った。

## 友だちと遊ぶ時期と遊ばない時期とある

。三歳十一ヶ月(40・12・10)上手にかくれんぼができた。

。三歳十一ヶ月(40・12・12)二人つながつた人の顔をかいて、「なかよしさんだ」という。

。四歳〇ヶ月(40・12・22)お友だちを四人よんでみんなでパーティー・パーティー。

。四歳〇ヶ月(40・12・26)おとなりの昌子ちゃんがお里がえり。夜「ママ、もう昌子ちゃんからおてがみつかな」

。四歳〇ヶ月(41・1・4)引越しの話が耳に入ったら、すぐ、「まあちゃん、引越しやだな」。昌子ちゃんといっしょでなきやー」近ごろ積極的に友だち遊びをしなくなる。オルガンに絵本を

のせて、勝手にひきながら、おもしろそうに、鬼の出る場面、やさしいおじいさんの話とか、いろいろ表現したりする。

弟とも仲よくなつて遊ぶようになる。

。四歳〇ヶ月(41・1・12)

「どうして男のにわとり、卵うまないの」「女のにわとりが生んだ卵を守らなきゃいけないからよ」「ふーんまあちゃんがたくさん卵うんだらたけちゃん(男の子)が穴ほって、卵をみんな中に入れて守ってくれるんだよ」

。四歳〇ヶ月(41・1・17)正子も里がえり、耳を悪くして三ヶ月通院しながら里にいる。

。四歳〇ヶ月(41・1・19)風の強い日、角をまがったとたん風が弱くなる。「ママ、ここ風がふいてないじゃないの。ほら、木がお話してないよ。風がふかない方がいいね。木たち、くしゃみ

やせきが出ないしね」

。四歳一ヶ月(41・1・30)

「ママと道を歩いていたら、木が一本立っていてね、まあちゃんはそれにのぼりたいと思ったんだけど、木が『きたない足でのはってほだめだよ』といってるように思えたから、のぼらなかつたんだよ」「今朝はまだ、木たちは笑わないね、さむいからまだ目がさめないのかな」

。四歳二ヶ月(41・3・2) 近所の子たちとよく遊ぶ。

。四歳三ヶ月(41・3・末) 遊びに夢中でいつも家にかえらぬといって泣く。

四月八日に新公舎に引越し、四月十一日が保育園の入園式。翌日発熱。疲れらしい。

。四歳四ヶ月(41・5・1) 「まっくらいところはおばけがいっぱい、あかるいところはひかりがいっぱい」

。四歳四ヶ月(41・5・5) 水に落ちた小さな紙のこいのぼりをみて、「ママ、大変、早くしないとこいがおぼれて死んじゃうよ」

。四歳四ヶ月 保育園から帰っていうことにつくりごとが多い。

「今日はおかたを計ったの、先生が『まあちゃんは重たいね』っていったよ」(計らなかった)

「今日はお注射したよ、よぼう注射、男の先生がきてやったんだ、泣かなかったよ」(していない)

今まで使わなかった方言を一人言や友人との会話に時々使う。

「はようおばあちゃん平井にこんかな、はよくりやええがなー。さと君をおんぶすりゃーええがなー。そうせんといけんがなー」家の者と話をする時は少しも使わない。

。四歳四ヶ月(41・5・16) 今日からおべんとう。六時から起きて出かけた。かえりが遅いと探しに出たら、近所のみおちゃんの家に寄って遊んでいてなかなか出てこない。やっとなつて帰った。おべんとうはからっぽ。

。四歳四ヶ月(41・5・18) 先生が家庭訪問、明るくて、積極的だという。

。四歳五ヶ月(41・5・27) また園からなかなか帰ってこないと思っていたら、宣伝カーに、広告のおめんとふうせんをたくさんもらって、途中でみんなにくばって歩いていった。

### 想像のことばの発達

。四歳六ヶ月(41・6・22)

「どうしてそんなことしたの、悪いのわかってんでしょ」「まあちゃんはもうやめよーっていったんだけど、手ーさんがいつまでもやめないんだもん」

。四歳六ヶ月(41・7・4)

「女性って女のこと?」「そうよ」「女は『いけませんよ』男は『いけねえぜー』っていうんだよ」

。四歳六ヶ月(41・7・7) 「ママ、今はそっとお空見たら、七夕のお星さまとお星さまがお話してたよ。ママそうとして、音



たててはだめだよ、しずーかにみててよ」

。四歳六ヶ月(41・7・15)「ママ、まあちゃんはいつても何時に夢の国に入っていくと思う?」「さあ十時かな」「ちがうよママなんかしらない時間に入るんだよ。ねえさと君はいつも夢の国の中でまあちゃんといっしょに出て来るから、さと君は知っているんだよ。ママ夢の国はとても広いんだよ。だけど入るとこおやねがとても低い、だからやつと入っていくんだよ。だからおとなは入れなくて、さと君だけいっしょに入れるんだよ。おふとんにちゃんとつかまっていけないと入れないんだよ」

「ね、まあちゃんが夢でしらないあたらしいお友だちとボートにのったよ。おっこちそうになって、日吉(母の里)についたんだよ、おもしろかったよ。その夢の中にさと君も入ってたんだ、だから、さと君には話さなくても、みんな知っているよね」

。四歳八ヶ月(41・8・25)洗面場で、「ママこんなのがくっついてるよ。あ、とれた、もとの形になってきたよ。はみがき粉だこれ。もとの形になるのがいやで、人間になろうと思って、かたくなってくっついていたんだよ。だめだよ、なれないよね」

。四歳八ヶ月(41・9・1)「ママまあちゃんのことお家ではまさ子っていういなよ、そうしたらいい子になるよ。およその子はしよう子ちゃん、さなえちゃんっていうて、まあちゃんのことほまさ子っていうんだよ、ね、いいでしょ」

。四歳十ヶ月(41・11・18)急に朝ねどこの中で、「みんなが、ちつとも遊んでくれないのでまあちゃん一人で、てんまりついて

遊んでいるんだ。『よせて』っていうてもいれてくれないし、先生が『みなさん』っていうてもいれてくれないんだ。『でぶっちゃ、でぶっちゃ』っていうんだよ。まあちゃんは保育園行きたくないな」

ようすを見に行きたいがあまり用もないのにふだん親が姿をみせないようにといわれているので、なんとなくのびのびになってしまった。学期末に一回誕生会をかねて参観日があるが、その時は、自由遊びなどなく、きまった保育をする。そのような時は、いつも積極的に楽しそうにやる。ついそんなことで深くも考えないでいた。しかしいつまでも話し言葉の中に自然に方言が出て来ることもなく、まだなんとなく前にいた所に未練があるような態度が土地の子どもになじまなかったのだろう。人ざらいではないのだからそのうちになんとかなると考えた。

。四歳十一ヶ月(41・12・15)

「どうしておふろには、こんなにたくさんお友だちがいるのかな。お水は一番強い王様、どんなにあついお湯でもお水がくれば負けちゃうんだ。ビニールの袋にまあちゃんが入れた水も、穴をあけて出てしまうし、まあちゃんと水遊びもしてくるんだもん。バケツもすごいよ、どんなにあついお湯でも平気だし、冷たい水をいれてもがまんしてくれるし、バケツも強いお友だちだよ。そしてせつけんのおぶくもまあちゃん大好き、ぶくぶくしていていっぱい作れるよ。おふろ場にはまあちゃんのお友だちがいっぱいだよ」

。五歳一ヶ月(42・2・19) なぞなぞ(よく思いつきの話をなぞなぞだといってお友だちと出し合っている)

「ぞうさんとくまさんの子どもが一つのおもちゃをとりっこしている」と、おじさんがのこぎりで二つにしてくれたので、仲良く遊べました。なんのおもちゃだったか……「つみき」「きつねのきんちゃん」と、おかみのおんちゃん二人で自動車の機械をめっちゃにいじって運転して道をめちゃくちゃにしてしまいました。そしておまわりさんが来ました。おまわりさんは二人をたいほしたでしょうか……しました……しません二人は子どもだから」

### なかよしの友だちができる

。五歳四ヶ月(42・5・16) 家庭訪問二度目、「とてもおねえちゃんぶりを發揮し、小さい組の子たちのめんどろをよくみる。おそうじなどもよくして、よく気がつく。人に迷惑をかけるようなことを少しもしない」ということ。

よく弟をつれて二人で外に出ていってながいこと遊んでいるようになる。

。五歳五ヶ月(42・6・13) 正子、昌子ちゃんの家におとまりする。きょうだいのようにいつもくっついていて、他の子の入るすきがないような感じ。昌子ちゃんも藤沢から転動してきた子どもで、二人がよその的存在にもみえる。少しの間別の友だちと遊んでも、やはりいつの間にか二人になっている。

。五歳七ヶ月 夏休みになって、また里がえり。たくさんお友だ

ちと遊べる時期にかえってしまふのはどうもよくないと思いがちでも、一ヶ月岡山を留守にする。ましかくなコンクリートの建物、うめたて地やきりくずしたがけはあっても、手近に樹々や草花もない新興地帯での毎日にくらべて、子どもたちにもはしゃぐ材料は豊富にあった。新幹線・昔なじみ・広い芝生の庭・こかげ・都会の新鮮さ……。生きかえったように楽しそうに見えた。しかし、岡山での友だち関係をよくない方にまた逆転させていたかもしれない。

。五歳十ヶ月 もっている人形に洋服のきがえをたくさんつくってやる。近所の子どもたちをつれてきて、半日机の下にもぐったり、いすで囲いをつくったりして、そこで、人形ごっこをしている。遊んでいる間中、なにかしゃべって楽しそう。

。五歳十一ヶ月(42・11・23) テレビみながら、

「大変だね、いい人だね先生って。正子の先生だって、自分もおなかやすいのに、みんながおべんとうたべてる時に、一人ずつお茶くんでくれるんだから、いい人だな」

。五歳十一ヶ月 お友だちがみんななわとびを上手にやっているのに、正子はうまくとべないので、この間からいっしょうけんめいおけいこしているようすだった。急によくとべるようになり、うしろとび、片足とびもできる。いつも、なわをもって外に遊びに出かけるようになる。

。五歳十一ヶ月(42・12・8) 「おとなになるのも昌子ちゃんといっしょ? ね? じゃ結婚するのいっしょかな」

。六歳〇ヶ月(42・12・22) 正子の誕生日に水ぼうそうが出る。お友だちをよぶのを楽しみにしていたのに、ひっそりとお祝いするはめになる。

。六歳〇ヶ月(43・1・1) 保育園にみんなでお出かける。お友だちもおおぜい来ていてみんなで仏前でおめでとうをいう。

正子、昌子ちゃんとおはじきでながいこと遊ぶ。

。六歳〇ヶ月(43・1・8) 急に雪がふり出して、みるまに積った。正子外にとび出す。あっちからも、こっちからも子どもがとび出す。雪あつめて大喜び。家に入つて来てから、

「正子はこれで三つのねがいになった。一つは雪が降ること。

一つは雪がつもつて、雪だるまつくること。一つは雪がっせんをみんなですること。よかったな」

。六歳一ヶ月(43・2・7)

「ママ、今日は大事件になるかと思った。大変だったんだよ。だが縁の下に骨があるっていつてね、骨のにおいがするっていつてね大さわぎ。みんながびっくりして、正子、新聞にのるかと思つたのに、縁の下よく見たらそれがただの銀紙だったの、大さわぎしてがっかりよ、新聞にのらないだもん。さと君(弟)こわくなった? ね? おねえちゃんの話こわくない? へえー、みんなの方がこわがりだったのかなー。動いたんだなんていつてさ、風が入つて動いたんだっていつても、しゃべったなんかいうんだよ。うそだとむねの中に思つただけ骨のにおいがするつていうんだよ。おかえりのすぐ前なのに、正子なんかちょっと白

い顔になつちやつてき。それから今日はいいこともあつたんだよ。大下君にたのまれて、帰りの列、正子先頭になつたんだよ」

。六歳二ヶ月(43・2・22)

「ママ、小学校に行つたら(身体検査) まあちゃんより背の低い人がいたね。まあちゃんちびっこじゃなくなったね。パパ、小学校に行つたら、まあちゃんより背の低い人がいてね、そのママが一号のスカート(制服を注文した時のこと)、これは長いね、といつていたのに正子にはちょうどよかったものね」

。六歳二ヶ月(43・2・29) 風邪で保育園休園。

「このごろずうっと先生は、マスクをしてるんだよ。いつでもちつともはずさないんだよ。みんなで変だつて話し合つたんだけど、きつとマスクの中になにか大事なものをかくしてるんだといふことになつたんだ。ちつともお咳も出ないし、熱があつたらぬていなきやいけないんだし、お風邪ひいてるみたいじゃないのに、ちゃんといつもマスクかけてるんだよ」

### 卒園と入学——友だちの転居と変化

。六歳二ヶ月(43・3・16) 卒園式。おおぜいのお客さまの前で平気で御挨拶ができる。

。六歳三ヶ月 よくなぞなぞをつくるが、以前のように、友だちや遊びを材料にしないようになる。「しかくが四つで、丸が六つあるものは、じどうしゃよ。むずかしい? 」

。六歳三ヶ月 四月に入つて、いっしょに保育園に通つたお友だ

ちや、年長組の時いっしょで一年先に一年生になっていたお友だちなどが、次々と転勤でいなくなる。

「みんな仲よくなると行っちゃうね。まあちゃんさびしくなっちゃった。まあちゃんもどこかへ行くの？まあちゃんのババもどこかへ行くようになるの？まあちゃんはずうっと岡山にいたいな」

。六歳三ヶ月（43・4・8）入学式、すぐ近くにある市立の小学校に入学、二級あって、中年の女の先生の級になる。男の子と女の子と半々で三十五人位。幼稚園を出て来た人が十人足らず、保育園出が十五人位、あとが保育所からという色分けたった。

。六歳四ヶ月（43・4・22）学校の先生が家庭訪問にみえた。「やつとほったのはれがひきましたね」といわれて、なんのこともわからずにいると、「土曜日にお友だちとぶつかってほったをばらして、ずい分泣かれて困りました」といわれる。家に帰って一言もいわないんだから……。なににつけ、学校であったことを必要以外家に帰って報告しない。

。六歳四ヶ月 このごろのなぞなぞ、「きっても、きっても、きれないすてきなきれはなんだ」といってから、「まだ答がみつからないけど、なんだかとてもいいなぞなぞにきこえるでしょ」

。六歳四ヶ月 近所の子どもたちは、みんな自転車にのれるのに、正子はまだ補助輪をつけてのっていたが、急にそれが恥ずかしくなった。補助輪をはずさせ、夕飯のあとまで、外に出て練習をする。なんとか一人で、のれるようになる。

。六歳四ヶ月（43・5・7）おむかひのアパートの六年生の男の

子ととても気が合う。今日も遊びに来て、二人で絵をかきながらお話をしたりしてながいこと遊ぶ。

。六歳五ヶ月（43・5・20）

「ババの次に好きな人がいるんだ。いさを君お兄さんみたいに思ってるんだ。正子は本当のお兄さんがほしいな。のんちゃんはいな、B組ののんちゃんはお兄さんがいるんだ。くみちゃんにも、三年生か四年生のお兄さんがいるし、お兄さんがいたらいいな、勉強も教えてくれるし、学校にいてもいいしよだし。いさを君も、弟は乱暴するけど、女の子はやさしくて、静かで、おしごとしてくれるからいいなーっていついていたよ。正子、いさを君とはなれるの、いやだー」

。六歳六ヶ月（43・6・28）

「ママは誰が一番好き？誰が一番おりこう？」正子と智見両方ともという答では満足でない。「どっちが一番好き？」ときく、弟とママと話をしていたりすると、よくしよぼんとして、すぐむくれたり、べそをかいいたりする。このごろ、自分が小学校に行っている留守に、智見がママを独占しているということがとても気にかかるらしい。なにか小学校の生活に満たされないものがあるのではないか。

。六歳六ヶ月 好きだといっていたいさを君の家も転勤。おせんべつに、夜中までかかって、布きれにししゅうをして縁かざりをつけて小さな敷物をつくりあげる。

よく遊びにいついていたマキちゃんの家も転勤。

。六歳七ヶ月 夏休みはまた里がえり。

。六歳九ヶ月 このごろ、特に小さな子どもたちとよく遊び、とてもまめにめんどろを見てやる。

### 話のあう友だちをもとめる

。六歳九ヶ月 (43・10・16)

「あーあ、だれも正子を相手にしてくれない。みんなは遊んでくれないし、りえちゃんも少し遊んでいただけ、『原田さんのここにくわ』っていつてしまったし、だれも相手にしてくれない(少し前までなわとびで遊んでいたのに)こうじ君(満二歳)と遊ぼうと思ったのに、こうじ君もさと君(弟)がとってしまし、だれも遊んでくれないの、あーあ、つまらないなー」

。六歳九ヶ月 (43・10・18)

「ね、ママ、どうして正子はみんなが、遊んでくれないの？ みんなが遊んでいる時いくともう人数が一杯だというの。野口さんだけは正子の気持わかってくれて、時々遊んでくれるんだ。だけどみんなとはちっとも遊べないの、みんなと遊びたいな。どうして正子はみんなと遊べないのかな。ねママ、いじわるしないよ。遊び方だってちゃんと知っているんだよ。だけどちっとも遊んでくれないんだ。だから、いつも一人で遊んでいるの、つまらない時は本を読んでいるんだよ」

。六歳十ヶ月 (43・11・19) 授業参観。なんとなく自信のないような、元気につつこんでいく強さが感じられない。絵は大きな絵

をかくていたが、遠足の絵などは、紙半分に空をかくて、雲の形ばかりを凝ってかくていた。

。六歳十一ヶ月 (43・11・24) 「ママ、下江さんとりえちゃんが

お友だちになったんだ。(今までもよく家のまわりなどで遊んでいたのをみかけていたが、お友だちという意味がちがうらしい)このごろいっしょに遊んでくれるんだ、うれしくなっちゃった」

正子は、はじめて岡山にきた時となりだった家の昌子ちゃんとは、次の引越しの時も、同じ場所に移ってきて近くだし、ずっととても親密につきあつて来た。二人は陰と陽ぐらい性格もちがうし、体格も正子は級で前から二番目、昌子ちゃんは一年生の女の子の中で一番高いので比較にならないが、おたがいになくてはならない間柄のようだった。しかし、これが友だちだと思っていて誰にでも親密な関係を期待するむきがあるのではないだろうか。

。六歳十一ヶ月 (43・12・7) 「今日、野口さんといっしょにな

わとびしたんだよ。うれしいな、だんだんお友だちができるよ。かえりもいっしょ。野口さんもちびで、わたしもちびだから、話があうの。ちびが六人いるんだけど、女の子たちは大きい子は大きい子で遊んで、小さい子たちを仲間にいれないの」

話があうということをとて重視する傾向がみられる。また、先生の話では、給食をたべる時、食欲もあるような子どもは、友だち関係にもあまり問題がなく、食のすすまいないような子どもに問題児が出るという。正子自身も感じている体力の差に原因があるのかもしれない。

。六歳十一ヶ月(43・12・9)

「ママ、本当は正子、昌子ちゃん好きでないの。いっしょに遊んでいてもおもしろくないの、でも遊んであげてるのよ」

今までより、人間を見る目がついて来たような点もみられる。

## むすび

これで、最近までの言動を、「友だち」という点から整理してみた訳だが、みんなといっしょに遊べず一人でいることが多いと先生に指摘され、自分も、みんなと遊びたいのにどうして遊べないんだろうとなやんでいることの究明になったでしょうか。

とにかく、小さい時から人一倍外になにかを求める傾向が強く、今でも、友だちがほしいとしきりに考えていることは事実です。しかし弟(満四歳)が、外にとび出していつては、行きあたりばったりだれとでも、かけずりまわって遊んでくるとちがった友だちを求めているようだところの思えて来ました。先生に(保育園でも小学校でも)「とても子どもらしいといえはいえませんが、いいかえれば他の子とくらべてとても幼稚なところがあるのです。幼稚というのではなく、まだ夢と現実が分離していないというのでしょうか」とよくいわれました。よその子がたくましくするんだと思いました。そのうちうちの子もおいつくだろうと思いました。しかし、いつになっても、夢か現実かわからないような気持が消えません。正子は友だちというものを、心と心のふれあいという点で感じているのではないのでしょうか。だれで

もいい、物でもいい、心と心が話しあえること。それが友だちだと思っているのではないだろうか、このごろ考えています。だから(体力的なことが大いに影響していることも見逃せませんが)ただおもしろくかけずりまわって遊ぶ友だちでない友だちが欲しく、しかしそう簡単にそのような友だちがみつかる訳がなく、いつのまにか、こちらから勝手に語りかける想像の友だち、夢や物などの世界と現実の人間社会がうまく分離できないいるのではないのかしら。幼児期や、小学校低学年でも、友だち関係がうまくいくとか、いかないとかいうことと別に、その子がどんな質の友だちを求めているかということも考えてやらねばいけないことじゃないのかしらなど、親馬鹿のひいき目で、子どもを理解しようとしたりもしています。

なんといつても、幼児期に、何度も転々と居をかえ、また、いっしょにいた方も、次々と他に移っていかれるという生活自体、大いに問題があることです。「お宅はまだお子さんが小さいからよろしいわ、小さいうちはあちこち移れても、中学、高校になったらそうそう変わるわけにはいきません。成績にひびきますからね」とよくいわれるが、やはり大事なのは幼児期、やわらかい芽生えたばかりの緑は傷つきやすいし、傷ついた若芽は、幹のある木の枝が折れたり曲ったのとは、大分意味がちがうと思えば、親の仕事のことだけで、あちこちにいかされる子どもたちが本当に気の毒になり、ますます考えさせられます。ただ、それに負けない強さも子どもに要求しなくてはいけない現実ではあるのですが。